

## 9. メリー D. ジェッシーと尚絅女学院

### 9.1 女子高等教育のヴィジョン



ジェッシー校長任命 (1919年)

メリー D. ジェッシーは、米国ヴァージニア州エッピングフォレストの農場主の家に、十一人兄弟の長女として生まれた。生家の建物は、米国初代大統領ジョージ・ワシントンの母方の実家から譲り受けたものであったという。ミズーリ州立大学で地質学を専攻、学生ヴォランティア活動に参加したことがきっかけで、宣教師になろうと志した。

高校と大学の教員免許を得て卒業し、さらに物理学を修め、1912(M45)年に WBFMSW の宣教師として尚絅に赴任した。その後、1917(T6)年、米国に戻り、コロンビア大学で宗教学の修士号を取得し、1919(T8)年に再び尚絅に戻った。

同年 8 月、ジェッシーは、ブゼルの後を継ぎ、第二代校長に就任することになった。

それ以前、1910(M43)年に女学校としての正式認可を受けた後、尚絅には更に家政科を中心に上級学校を作る構想があった。しかし 1918(T7)年、アメリカン・バプテストを含む七教派が中心となって東京女子大学が設立されることになった。このため、尚絅には、これと競合しないように、大学進学準備課程でもある三年制の高等科を設置することになった。1921(T10)年、高等科(英文科、家事科)の設置が認可され、六十一名が入学した。1922(T11)年には音楽科も設置された。

ジェッシーは、教育方針として「平和教育」を採り入れた。彼女は尚絅の教育の目指す「平和」について、「猜疑、略奪、残忍の中の平和」ではなく「キリストの平和」であり、各国がこぞって研究すべき「新しい科学」であると捉えている。当時としては先駆的な取組みであったと思われる。今日でも、平和教育は尚絅の一つの伝統となっている。

Jesse, Mary Daniel  
(1883.11.16-1968.5.  
12)

#### 平和の意義について

第一次大戦の「平和条約」締結(1918年)を記念して

メリー D. ジェッシー

平和という言葉は人の注意をひく美しい言葉であります。その平和の訪れを聞いたとき、世界の人々は歌いつつ行列をして大喜びをしたのです。それは今より四年前、すなわち 1918 年の今月今日でありました。

…私共の平和は、キリストの平和、正義、道徳的の平和であります。猜疑、掠奪、残忍の中の平和ではありません。今日、本当の平和がないのは、我々がキリストの精神を受けていないからであります。

… どの国も、軍のために莫大な金を使って惜しみませんが、平和のためその百分の一の半分も金を費やしていないのは、本当の平和というものを考えていない証拠であります。平和はたしかに一つの科学であります。しかし、どこの学校でも、また教科書の中でも平和について教えておりません。今後各国は、挙って研究しなければならぬ「新しい科学」なのです。いかにしてこれを学ぶべきか、これは皆が考えて行かねばならぬ問題です。平和の根本問題は兄弟の愛をもって互いに愛する事で、交際も商事もそれに従属して行われねばならないものであります。

1922(T11)年 11 月 11 日

1923(T12)年 9 月 1 日、関東大震災発生。尚綱でも全生徒が捜真女学校(アメリカン・バプテスト、横浜市)など被災地の生徒のための寄付や、縫い物や編み物をして支援した。

この頃吉野作造も被災者支援に奔走していた。  
本資料 p.38 参照

当時、女子の高等教育機会が乏しかったこともあり、尚綱は多くの志願者を惹きつけた。1922(T11)年に設置されたばかりの音楽科が 1924(T13)年の終わりに廃止されたが、狭い校舎に、より多くの学生を受け入れる必要に迫られたことも一因であったと思われる。この年 1919(T8)年に開設されたばかりの幼稚園も閉園されている。しかし音楽科廃止後も、一般生徒に対して行われていた尚綱の音楽教育は、収容限界を超えるほどの本科志願者を惹きつけるプログラムだった。

### 9.2 過労

1924(T13)年 9 月、ジェッシーは休暇で帰米する。ジェッシーは、幼稚園から高等科(ジュニア・カレッジ)までを含むキャンパス構想を描き、休暇を利用してそのための資金集めをしようと決意していた。だが、日露戦争の後、第一次世界大戦とその後の不況、そしていわゆるモンロー主義の下で、米国の対日感情は、すっかり冷めたものになっていた。そうした中で募金活動が難渋を極めたことは想像に難くない。しかも、ジェッシー本人が健康を害し、大きな手術を余儀なくされることになった。

これらの多くの障害にもかかわらず、彼女は遂に 1925(T14)年秋、インディアナ州バプテスト教会連合から五万ドルの寄付の約束を取り付けることに成功する。

こうして 1926(T15)年秋に帰国したジェッシーは、早々から校務に忙殺されることとなった。尚綱では、ジェッシーのたつての勧めで 1924(T13)年から校長代理を務めていた川口卯吉が、1926(T15)年 2 月から校長に就任していた。しかし WABFMS は宣教師が方針を決めて指導することを期待し、川口校長以下日本人スタッフも、あらゆる運営会議に彼女の出席を求めた。高等科新校舎建設のための米国での資金集めも予定通り進まず、

こちらの方の対策も求められていた。

1927(S2)年 11 月、ジェッシーはついに過労で倒れ二ヶ月間仙台を離れ静養せざるを得なくなった。

1928(S3)年 2 月に復帰するが、1931(S6)年には米国に残してきた母親の健康状態が悪化し、休暇を利用して帰国した。ところが、宣教師派遣母体である WABFMS の財政悪化などから、休暇が終わっても日本に戻れなかった。そこで、ジェッシーは、アメリカの南部バプテスト連盟の力を借りて、三年契約の英語教師として西南女学院(現在の西南女学院大学、北九州市、旧小倉市)に赴任するという形で、1934(S9)年に日本に戻った。

1935(S10)年には川口校長が辞任、安藤謙助が校長に就任し、「学校更生五カ年計画」を発表した。当時尚絅は財政難に陥っていたが、やはり財政的に厳しい状況にあった WABFMS からの自立を目指し、独立期成後援会を結成して募金活動を強化していく。

1936(S11)年 2 月、遠野から仙台に戻っていたブゼルが召天した。ジェッシーは 1937(S12)年 7 月、病気の母親を見舞うために再度帰米するが、母の勧めに従って、1938(S13)年 5 月、再び尚絅に戻る。その時には既に日米関係は極めて厳しいものになっていた。

### 合併の危機

1933(S8)年、WABFMS は、海外諸国の重い財政負担を逃れるため、尚絅と宮城女学校(現宮城学院、米国ドイツ改革派)の合併を提案した。しかし、関係者の合意は得られなかった。両校それぞれの伝統は、既に確固たるものとなっていたのである。

二つの高等科を廃止する案も出された。東京女子大と重複していると見られたのである。しかし、これも実現しなかった。高等科の存続を可能にしたのは、草の根レベルで始まった独立基金積み立て運動の成功であったということが出来る。

目標額 10 万円が集まったのは安藤校長の死後の 1940(S15)年だった。予想より二年早い目標達成であったが、その時には、日米開戦まであと一年に迫っていた。

### 9.3 キリスト教や西洋文化の敵視

戦争の危機が迫る中、在日宣教師はそれぞれ、母国に帰るか、日本に留まるかの選択を迫られていた。世の中の風潮としては、キリスト教会や西洋の影響を受けたあらゆるものが激しく敵視されるようになっていた。しかし、個々の宣教師の働きを知る多くの人々は、政治的なこととは切り離して、宣教師たちに対して、それぞれの立場で可能な限り誠実に接していた。

1931(S6)年満州事変  
1933(S8)年国際連盟脱退  
1937(S12)年盧溝橋事件、日中全面戦争開始  
1938(S13)年国家総動員法公布

### 9.4 ジェッシーの米国帰国

ジェッシーは、日本に留まることを願っていた。しかし、1941(S16)年 4 月、休暇を期に帰国した後、両国は戦争に突入し、結果的に不在は六年間にわたった。

1941(S16)年 12 月 8 日  
太平洋戦争開戦

## 尚綱学入門

ジェッシーはヴァージニア州で教師の職を探したが親日家と見られ、職を得ることが出来なかった。彼女は「わたしは仕事を得るために、友人たちを裏切ったり、不忠実であることは出来ません。日本人に関する仕事につくことをわたしは願っています」と語り、1943(S18)年、アリゾナ州日本人抑留キャンプの教師職に就いた。